

## 目次

凡例	v
人物関係図（略系図）	viii
① 兵部卿宮の登場	2
② 故式部卿宮の姫君への恋慕	4
③ 北山への逍遙	8
④ 西の京での垣間見	10
⑤ 女君の素性	16
⑥ 兵部卿宮の来訪	22
⑦ 女君との逢瀬	26
⑧ 後朝の文と女君の反応	28
⑨ 乳母の反応	30

10	うちとけゆく二人……………	32
11	宮の姫君、齋院に決定……………	34
12	兵部卿宮の憂愁と女君への夜離れ……………	36
13	右大臣の姫君との縁談……………	40
14	女君に出仕の勧め……………	44
15	乳母の死去……………	48
16	女君の悲嘆……………	50
17	侍従の諫め……………	52
18	再度出仕の勧め、女君の承諾……………	54
19	兵部卿宮、女君を思い出す……………	56
20	久々の来訪、侍従の反応……………	58
21	本心を打ち明けられない二人……………	60
22	突然の出仕要請……………	64
23	出立直前の女君へ、兵部卿宮の手紙……………	66
24	右大臣家で歓待される女君……………	70
25	兵部卿宮、女君の失踪を知る……………	70
26	兵部卿宮の憂愁募る……………	74
27	宮仕えに慣れゆく女君……………	76
28	兵部卿宮と右大臣の姫君の結婚……………	76
29	女君、中將の正体に気づく……………	78
30	女君、兵部卿宮と遭遇しかける……………	82
31	兵部卿宮、女君の筆跡に気づく……………	84
32	女君、兵部卿宮の前での弾琴……………	86
33	思い乱れる女君……………	90
34	兵部卿宮、女君の局に忍び入る……………	92
35	思いを訴える兵部卿宮……………	94
36	兵部卿宮からの度々の手紙……………	98
37	女君、死すら思う苦悩……………	100

38	出家を願う女君	102
39	女君の出奔	104
40	女君、嵯峨野に到着	106
41	宮邸の騒ぎと、書き残された和歌	108
42	兵部卿宮の悲嘆	112
43	女君の出家	114
44	出家後の生活	116
45	若き尼君の情報、兵部卿宮、嵯峨へ	118
46	兵部卿宮一行、尼君の家を訪ねる	120
47	尼君の所在不明	124
48	部屋に侵入、兵部卿宮の未練	126
49	尼君、梅尾へ	128
	解説	133
	あとがき	137

## 凡例

一、底本には、慶應義塾図書館蔵本を用いた。翻刻にあたっては、以下の影印を使用した。

高橋正治『兵部卿物語 校本・影印篇』（東京美術 一九八四年）

また、『室町時代物語大成』所収『兵部卿物語』も同本を底本としているため、適宜参照した。

一、校合には、実践女子大学蔵本を用いた。以下の影印・翻刻を使用した。

市古貞次「黒川文庫蔵「兵部卿物語」影印」（実践女子大学芸資料研究所『別冊年報』Ⅱ 一九九二年三月）

市古貞次「黒川文庫蔵「兵部卿物語」翻刻」（実践女子大学芸資料研究所『別冊年報』Ⅲ 一九九四年三月）

また、『続々群書類従』所収『兵部卿物語』の本文（おそらく実践女子大学蔵本を底本とする）も参考にした。底本の本文を訂正する場合には、当該箇所「\*」を付し、本文左端にその旨を明記した。

一、翻刻に際しては、通読の便を考慮して、次のような操作を行った。

- 1 内容の上から節に分け、番号と小見出しを付けた。
- 2 句読点・濁点を加え、会話文には「」を付けた。心内文には「」を付けていない。
- 3 仮名遣いは、歴史的仮名遣いに統一した。仮名を漢字に、漢字を仮名に直したり、送り仮名の不足する場合にはそれを補ったりしている。

4 助動詞「む」「らむ」「けむ」などは、すべて「ん」「らん」「けん」などに統一した。

5 敬語動詞「給ふ」「奉る」「聞こゆ」「候ふ」などは、本動詞・補助動詞問わず、すべて漢字表記に統一した。また、底本における「侍り」は、すべて仮名表記（「はんべり」）だが、漢字を用いた上で、ルビを振るのも初出箇所のみとした。

6 官職や人物の呼称で、慣習上「の」を入れて呼ぶべきもののうち、次のものは「の」を省略して表記した。  
兵部卿宮 式部卿宮 按察使大納言 大膳亮 藏人尉

7 反復記号は、もとの文字に戻して表記した。一字の漢字の反復は「々」を用いた。

一、注釈については、次の点に留意した。

1 実践女子大学蔵本と異同がある箇所、底本のままとした箇所については、注釈内で説明をした。

2 他作品の本文の引用は、基本的には、『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠った。ただし、『狭衣物語』の引用は『新潮日本古典集成』（新潮社）、中世王朝物語の引用は『中世王朝物語全集』（笠間書院）、和歌の引用は『新編国歌大観』（角川書店）に拠り、それ以外の活字テキストを使用した場合には、そのつど明記した。引用箇所のうしろに付けた数字は、丸数字が活字テキストの巻数、算用数字が頁数である。

3 注釈内で言及した主な先行研究は、以下の通りである。

宮田和一郎『兵部卿物語』（『武庫川学院女子大学紀要（人文科学編）』4 一九五六年二月）

妹尾好信・渕野百合子「訳注『兵部卿物語』（上）／（下）」（『大分大学教育学部研究紀要』14-2／15-1 一九九二年十月／一九九三年三月）

片岡利博「兵部卿物語の構造——『狭衣物語』『小夜衣』との比較を通して——」（『物語文学の本文と構造』和泉書院 一九九七年 \*初出〓一九七九年）

辛島正雄『『兵部卿物語』の成立時期をめぐって——擬古物語の源泉』・補説 宮田和一郎氏の『兵部卿物語』校注』（『中世王朝物語史論』下笠間書院 二〇〇一年 \*初出〓一九八三年／一九八五年）

西本寮子「中世擬古物語創作の一手法——『兵部卿物語』からの考察——」（『広島女子大学文学部紀要』26 一九九一年二月）

一、現代語訳については、次の点に留意した。

1 本文では「」の付いていない心内文にも、読解の便宜を図り、「」を付けて訳した箇所がある。

2 主要な女性登場人物の呼称は、以下のようにして区別した。

故式部卿宮姫君 ↓ 宮の姫君 故按察使大納言姫君 ↓ 女君（按察使の君・尼君） 右大臣姫君 ↓ 姫君

一、本書の構成は、基本的に、見開き右頁に「本文」、その下に「現代語訳」、見開き左頁に「注釈」を置いた。「本文」と「現代語訳」がなるべく同じ頁内で対応するように、左頁最下段を「現代語訳」に使った頁もある。「注釈」のうしろには、場合によって、「評」を置いた。

一、「本文」と「現代語訳」は秋本、「注釈」と「評」は藤井が主に担当した。

〔付記①〕貴重な資料の翻刻許可をいただいた慶應義塾図書館に、厚く御礼申し上げます。また、東京美術、実践女子大学図書館にも、影印の使用についてご高配いただいた。感謝申し上げます。

〔付記②〕本書は、平成三十年科学研究所補助金（若手研究（B））「中世王朝物語の生成過程解明のためのジャンル横断的研究」（代表・藤井由紀子）による研究成果の一部である。

## ① 兵部卿宮の登場

1 その頃、兵部卿宮と聞こえさせ給ふは、当代の二の宮にてぞおはしける。  
2  
3 あまたおはします御子たちの御中にも、とりわけて、帝、きこい後の宮もあは  
れに思ほしかしづき給ひつつ、同じくは御位もこの君に、おほと思しけれど、  
4 世の聞こえ、人の譏りそしを思しつつ、一の宮、春宮に立たせ給ひて、これは  
5 次の坊がねにて、内々の御かしづきは、なかなか言ふばかりなき御おほえ  
なり。

御容貌かたちのきよらにうつくしくおはしますこと、7昨日より今日はまさり、  
今日より明日はあす勾かひ加かはり給ふやうにて、ただ一目見奉る人だに、8千世の  
齢よほひも延ぶるやうになんありける。御才かしこくおはしますこと、また世  
になく、9幼く\*より帝の御側そばにて教へさせ給ひければ、何事につけても、  
\*かたはなることなくぞおはしける。

\*より——ナシ。実践女子大本「より」  
\*かたは——かた。実践女子大本「かたは」

1 その頃 物語の常套的な冒頭表現。「源氏物語」続篇(紅梅・橋姫・宿木・手習卷)の巻頭表現として用いられ、以降、物語全体の始発に置かれるようになった。「堤中納言物語」「はなだの女御」は、「そのころのこと」と、あまた見ゆる人まねのやうに、かたはらいたけれど(47)と始まり、当時、「その頃」で始まる物語が数多くあったことが窺われる。同じく「その頃」で始まる中世王朝物語に「しのびね」がある。

2 兵部卿宮 「兵部卿」は、兵部省の長官。正四位下相当。親王がこの官職に就く場合、「兵部卿宮」と呼ばれる。「源氏物語」には、三人の兵部卿宮が登場する(紫の上父・螢宮・勾宮)が、このあとの本文に勾兵部卿宮の模倣が多いことから、本に勾宮の人物造型に影響を受けていると考えられる。

3 あまたおはします御子たちの御中にも、とりわけて…… 以下、兵部卿宮に対する帝と後の偏愛ぶりは、「源氏物語」桐壺巻における桐壺帝の光源氏への愛情、勾兵部卿宮における今上帝・明石中宮の勾宮への愛情の描写を髣髴とさせるが、詞章的には、薄雲巻の「あまたの皇子たちの御中にとりわきて思しめし」(2456)を模倣するか。「とりわけて」は、平安

和文であれば「とりわきて」とあるところ。

4 世の聞こえ、人の譏り 兵部卿宮を春宮にすることに對して予想される世間の非難。「源氏物語」桐壺巻で、桐壺帝の桐壺更衣や光源氏への偏愛が、「人の譏り」(17)「世の譏り」(21)の対象となつたことが想起される。

5 これは次の坊がねにて 「これ」は、兵部卿宮を指す。「坊がね」は、春宮候補者。「源氏物語」勾兵部卿宮では、二宮(勾宮の兄)が「次の坊がねにて」(518)と述べられる。

6 うつくしく 形容詞「うつくし」は、本物語で多用されるが、人物の容姿の美しさを表す場合がほとんどで、愛しい、かわいいの意で使われることは少ない。

7 昨日より今日はまさり、今日より明日は勾かひ加かはり給ふ 兵部卿宮の美しさが、日ごとに増すやうに思われるほどであるということ。「源氏物語」若菜上巻で、紫の上の美しさが「去年より今年はまさり、昨日より今日はめづらしく」(489)と描写される箇所の模倣。

8 千世の齢も延ぶるやうに 千歳もの寿命が延びるかのやうに。「源氏物語」若菜巻で、光源氏の美しさに接した北山の僧都が、「いみじう世の愁へ忘れ、齢のぶ

① その当時、兵部卿宮と申し上げなされる御方は、当代の帝の第二皇子でいらつしやうた。たくさんおいでになる御子様方の御中でも、格別に、帝も后宮(皇后)も、しみじみといとお思ひになり、大切に育てては「同じことならば天皇の御位もこの君(第二皇子)に譲りたい」とお思ひになつたけれど、世間の評判や他人の非難のことをあれこれ考へなされて、一宮(第一皇子)を春宮にお立てになつて、この第二皇子は次期春宮候補となつて、内々の御養育への御熱意は、かえつて口では言えないほどの御寵愛ぶりである。

この宮の御容貌が清らかで美しくいらつしやることは、昨日より今日はまさり、今日より明日はさらに美しさが加わりなされるやうで、ただ一目この宮を見申し上げる人々でさえ、千年もの寿命も延びるやうな気になる状態であつた。その御学問の御才能が秀でていらつしやることは、また世に例がなく、幼い頃から帝の御傍で、御自身がお教へになつたので、何事につけても不完全・不十分なことではなくていらつしやうた。

今出川のほとりに、広くて風情のある御所を造営して、宮の里邸ということにして、宮中でも梅壺を専用の御部屋とする御ありさま(1209)と述べる箇所の模倣か。「千世の齢」は歌語的表現。参考「咲かきりちらではてぬる菊の花むべしも千世の齢のぶらむ」(「貫之集」四二)

9 幼くより帝の御側にて教へさせ給ひければ 学問の手ほどきを帝から直々に受けたということ。「源氏物語」桐壺巻で、光源氏が帝の「御あたり去りたまはぬ」(143)状態で育つていたことが想起される(光源氏が帝のもとで学問や諸芸を修めたことは、少女巻・絵合巻で回想として語られる)。「御側(そば)」は「源氏物語」には例がなく、平安後期(「栄花物語」「讀岐典侍日記」など)から見出すことのできる表現。

## ■評

物語の始発、主人公である兵部卿宮が紹介される。その人物像は、「源氏物語」における光源氏と勾宮をあわせて模倣することによって作り上げられている。「源氏物語」の二つ以上の巻(ここでは桐壺巻と勾兵部卿宮巻)をベースにし、他の巻で印象的に使われている詞章のみを取り込むという模倣のあり方は、この物語全般によく用いられる手法である。